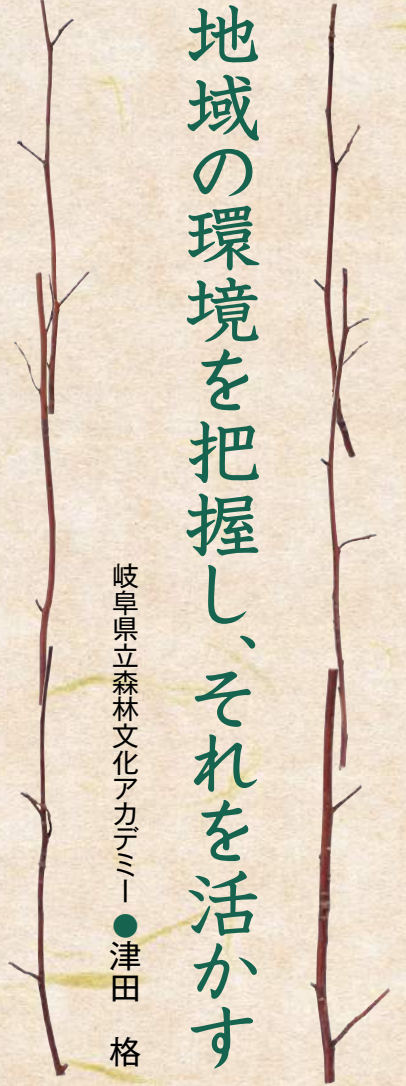


地域の環境を把握し、それを活かす

岐阜県立森林文化アカデミー ● 津田 格



休日にはしばしば子供にせがまれ、近所の小川に釣りや採集に出掛けます。ほんの数時間で多くの魚や水生生物が採れ、子供とともに嬉々としてバケツを覗き込んでいます。そこは近隣の方の散歩道にもなっていて、「何がそれか？」と話しかけられることもありま

す。お見せすると、「こんなのがまだこんなにいるの？」と驚かれます。確かに景観としては、かつての風景とは大きく様変わりしているのかもしれない。けれども丁寧に観察すると、意外にも豊かな環境が存在していることに気づかされるのです。

本となる種を最低五〇種は覚えるように指導しています。五〇種という多く感じるかもしれませんが、岐阜県内のちよつとした山を歩けば、比較的簡単にそれくらいの種数を数え上げることができます。

基本的な種を覚えると、それをもとに凶鑑で調べることができるようになります。また重要なのは、ある生物を見分けるだけではなく、その特性や人との関わりを同時に知ることです。そういった情報は同定の助けとなり、今後その地域の環境とどのように関わっていけばよいのかを考える際のヒントにもなります。もちろん生物だけでなく、地形、地質、気候、人口、産業など様々な要素がその地域の環境には絡んでいます。でもやはり農林業の視点で地域の環境を把握し、活用方法を探るとすれば、そこに生息する生物種の構成を知ることが必要です。

昨年年度から県内のある自治体の方とともに、かつて里山として利用されて

いた森林の活用方法について検討し、取り組みを行ってきました。その森林はかつてマツタケ山だったそうで、できれば昔のようにマツタケが採れるようにしたい、そうすれば地元の人たちの山への関心も出てくるので、というのが自治体側の当初の意向でした。ところが調査をしてみると、アカマツの密度は非常に低く、残されたアカマツも高齢化していました。これではマツタケ山に戻すには長い年月がかかり、現実的ではありません。そこで代替案として、そこに沢山ある広葉樹を伐採し、腐朽性きのこの栽培を行うことを提案しました。しかしシイタケ等は一般的すぎて面白みに欠けますし、原木として使える樹種も限定されます。そこでまだそれほど普及していないマイタケの原木栽培を行うことにしました。マイタケの原木栽培は、植菌前に原木を滅菌する手間が必要ですが、使える樹種の幅も広く、また普通のきのこ栽培では使いつらい大径木も使うことができます。まずは短く玉伐った原木をドラム缶で6時間ほど煮込んで煮沸滅菌し、袋に入れて冷ました後、マイタケの種菌を接種します。春先にそれらの作業を終え、数ヶ月間室内に静置して培養した後、夏前にほだ木を袋から取り出して圃場に埋設しました。そして9月末に待ちに待ったマイタケが発生し始めました。実際に大きなマイタケが収穫できると、俄然やる気が出るようです。今後、規模が大きくなれば収穫物の販売先等も検討していく必要はありますが、助走段階としてはまずまずのスタートでした。

このマイタケ原木栽培の事例においても、最初にその環境をどう捉えるか、そこにある資源をどう活かすかで、方向性が変わってきます。マツタケ山に固執すると結果が出るまでに息切れしてしまうかもしれません。昔ながらの利用方法も残っていますが、新しい方法も様々な形で生まれてきています。環境を丁寧に調べあげて把握した後は、様々な知見、新しい技術を取り入れながら、そこにある資源を効率よく持続的に活用する方法を考えていきたいところです。



マイタケの発生